



1. まえがき	...	1
2. 関連学会の紹介	...	1
3. 関連研究プロジェクトの紹介	...	2
4. 今後の活動予定	...	4
5. HCグループからのお知らせ	...	4

1. まえがき

ヒューマンコミュニケーショングループの活動分野は、前号の各研究会の活動紹介にも見られるように単に理工学系の分野だけでなく、人文社会系の分野なども含んだ、いわゆる学際的な分野を対象としています。

そこで、今号はヒューマンコミュニケーショングループに関連が深いと考えられる学会や研究プロジェクトについて紹介します。

2. 関連学会の紹介

HCグループが対象とする研究分野に関連した学会は沢山ありますが、その中から今回は特に関連が深いと考えられる以下の2つの学会分野について紹介します。

2.1 心理学関連の学会

心理学に関連する学会等も広範にわたっていますが、その中で、ヒューマン・コミュニケーションに主に係わるものを紹介します。

(a) 日本グループ・ダイナミックス学会

創立の歴史の長い社会・集団の心理学に関する実証的な研究を追究する学会で、集団活動、リーダーシップ、集団内コミュニケーション、対人関係の過程（認知、魅力などを含む）のダイナミズムなどを基本的な研究分野としています。また、裾野は広く、社会的スキル、社会的交渉、非言語的コミュニケーションに関する研究も少なくありません。大会は概ね秋に開催されます。刊行雑誌は「実験社会心理学研究」（年3回、1回は英文号）です。事務局は、奈良大学社会学部矢守研究室です。

(b) 日本社会心理学会

社会学的な視点や、マクロ現象への視点への広

がりを持つ学会で、調査、フィールド研究も少なくありません。以前は今以上に社会学的な色彩の強い研究が多く見られました。災害・パニック、ストレス・健康、メディア・コミュニケーション、マス・コミ、地域・社会現象などの研究テーマが見られます。秋の学会の他に年1、2回の公開シンポジウムが開かれます。雑誌は「社会心理学研究」（年3回）で、事務局は東京大学文学部池田研究室です。

(c) 日本心理学会

心理学分野に於ける研究者規模では日本でほぼ最大の学会で、1994年に社団法人化されました。理論から応用、動物から人間、コンピュータ・シミュレーションまで心理学各種の分野を擁しています。秋に研究大会が開かれ、雑誌は年6回の和文誌（心理学研究）、4回の英文誌（Japanese Psychological Research）があります。

(d) 日本応用心理学会

基礎研究よりもテスト開発や人間関係訓練、能力測定・開発などの研究も多い学会です。ただし、基礎的な研究も少なくありません。分野的には、多岐に渡っています。秋に大会、年1、2回の公開シンポジウムが開催されます。雑誌は「応用心理学研究」（年1回）で、事務局は日本女子大学高橋研究室です。

(e) 日本感情心理学会

感情について多方面から考える学会で、心理学内での一種の「学際的」色彩があります。生理的測定、感覚知覚、感情の文化比較、コミュニケーションと感情の関係などの研究が見られます。雑誌は「感情心理学研究」（年2回）で、事務局は同志社大学文学部心理学研究室です。



(f) 日本行動科学会

以前は異常行動学研究会と称していた学会で、行動現象への客観的アプローチを旨としており、動物行動、対人行動、相互作用への視点が多いのも特徴です。大会の他に合宿形式の研究会（ウインター・カンファレンスなど）も伝統となっています。事務局は北海道医療大学高橋研究室です。

また、この他に、日本コミュニケーション学会（英語関係、コミュニケーション学関係者が主で、異文化間コミュニケーション、対人コミュニケーションなどの研究も見られます）、日本教育心理学会（教室での教師対生徒のコミュニケーション行動や児童間の遊びや仲間間、集団でのコミュニケーション研究なども見られます）、日本認知科学会、日本性格心理学会、日本心理臨床学会など多くの学会があります。

なお、大半の学会で年3、4回のニュース・レターを出しています。

（大坊 郁夫：北星学園大学文学部 教授）

2.2 日本顔学会

顔学会が発足－総合化が求められる時代に－

今年3月に日本顔学会（略称：J-face=ジフェイス）が設立されました。これまで3年ほど電子情報通信学会に共催頂きながらシンポジウム「顔」（実行委員会代表、原島博東京大学工学部教授）を開催してきましたので、ご存じの方はやっと学会になったか、という感じを抱かれたのではないのでしょうか。

「顔」を研究テーマにしている人や仕事にしている人から、顔に関連する研究や仕事をされている人、顔の研究に関心が高い人など、「顔」を中心にさまざまな人たちが集まって学会となりました。これまで各学問分野で個別に行なわれてきた顔に関する研究が、シンポジウム「顔」で培われた研究者ネットワークにより「線」で結ばれ、今年からは「顔学」として「面」となり、「立体」になろうとしています。

このような学会は世界的に見てもまれな学会であるため、新聞・雑誌やテレビ・ラジオで何回も取り上げられており、見聞きされた方も多いと思います。半年を経た現在の段階で500名近い会員数となりました。その約半数が歯科医で、次いで電子工学を中心とした工学者、メイクアップ・アーティストを含む化粧品・美容関係者、心理学者、医者などが主な構成員となっています。

今後の活動として、シンポジウム「顔」はもちろん、年1回の学術会議、セミナーの開催、学会誌の発行など学会としての形を整えていく一方、独自の活動も模索しています。

日本顔学会の設立は、言うまでもなく従来の専門化、細分化してきた研究の流れに対して逆の、統合化、総合化の動きです。言い換えると、それ

までの断片化された顔、データ化され、数値化された顔から、顔が一つの顔としての「顔格」を取り戻す動きとして捉える事ができるのではないのでしょうか。誰もが持ち、それぞれが一家言あってもおかしくない「顔」、その顔についてあらゆる角度から考えることを前提にしようとする新しい動きと言えます。

この点は今後の技術と人間のあり方を考えようとしたとき、不可欠の視点であると私は考えています。今まで以上に、社会や文化に立脚した技術、生活者の視点とのコミュニケーションが必要とされるでしょう。

顔学会においても、すでに行われている専門家の研究にプラスして、従来型の専門家ではない学会員による日常生活の中での顔の研究がこれから要求されて来ます。例えば、現代人の顔観を経年的に定点観測し、その変化を探っていく、また地域差を求めてもよいでしょうし、国や民族による違いまで発展させてもよいでしょう。過去20年程のマスメディアにおける顔の扱い方の変化、例えば男性の顔がショウユ顔、ソース顔と呼ばれる以前の表現はどうだったのか、なぜそのような変化が生まれたのか、時代による顔の価値の変化と社会との関係は？、美貌と社会との関係は？、などなど、コンピュータを最初から使わなくてもできる研究はたくさんあります。しかも、自分たちの生活している世界に転がっている情報を資料として研究することは、比較的容易なことでしょう。

顔学会の成立は、さまざまな社会や技術の変化と関連しています。言い換えれば、社会の変化や技術の発達が顔学会の成り立ち＝総合化＋相対化を可能にしました。このことは再度私たちのそれぞれの研究分野に影響を与えて来ましょう。コミュニケーション一つをとっても、コミュニケーションとは何かを問うたとき、従来なら絶対的に考えられて一つの回答を求めればよかったものが、最近では男女により年代により文化の違いにより異なる、と言うように相対化されて、たくさん回答があることが当たり前の時代になろうとしています。

ひとりひとりの顔そのものが個性と認識される時代、個性化の究極としての「顔」が登場する時代です。コミュニケーションの研究も新たなステージに入りかけているのでしょう。

（村澤博人：日本顔学会理事、ポーラ文化研究所）

3. 関連研究プロジェクトの紹介

HCグループに関連した研究プロジェクトとして、次の2つの研究プロジェクトがあります。

3.1 文部省重点領域研究「人工現実感」

平成7年度から3年計画で開始された「人工現実感」の研究の正式名称は「人工現実感に関する基礎的研究」であり、副題として「仮想世界の生

成と人間との相互作用に関する研究」をうたっています。人工現実感生起のメカニズム、人間とのインタフェース設計法、物理法則を加味した仮想世界の構築法、人工現実感の医学的・社会的影響の評価などの基礎的な研究を工学、心理学、生理学、医学などの視点から行うものです。

本研究では、コンピュータによる合成世界と人間とのかかわりを図1に示すような視点で捉え、それに基づき計画研究と公募研究を次に示す4つの研究班に分けて進めています。

(a) 人工現実感の解明に関する研究

本研究グループでは、人工現実感における人間の感覚統合と三次元空間の認知の機序、感性の機序、論理等悟性の機序を情報制御工学、認知心理学、動物行動学、大脳生理学の観点から探求し、臨場感・現実感・存在感との関わりを解明の手がかりを探ろうとしています。

(b) 感覚提示と感覚・行動相互作用に関する研究

本研究グループは、人間が仮想環境と自然な形でインタフェースするための入出力デバイスの提示特性や操作性の問題を人間の認知行動特性の面から体系的に検討し、人工現実感のための提示行動デバイスの最適設計法を模索しています。

(c) 仮想世界の構成手法

本研究グループは合成される人工世界について研究を行っています。特に物理法則や生物原理を導入した仮想世界の構成法や現実感演出技術など複雑な仮想世界を創出するための道具立てを整備し、それをを用いて仮想世界を作り出し、その可能性を探っています。

(d) 体内および外部世界の人工現実感の評価研究

1班から3班(上記(a)~(c))までの3研究グループがシステムを構築する上での基本的知識体系の構築を目的として研究しているのに対し、本研究グループはそれを外側から眺める立場をとっています。すなわち、こうしたシステムが社会で一般化し、人々が頻りに接するようになったとき、一体どのようなことが起るか社会的、医学的に検討し評価するとともに、健全な技術の進展のための方策を探っていきます。また、手術支援などの医療応用や人工現実感を、高齢者・障害者の社会復帰の手助けのための技術とする福祉分野での研究も合わせ行っています。

領域研究の進めかたとしては、総括班を中心として、全体会議と班会議のほかにシンポジウムを開催して人工現実感の領域研究の進展を図っています。シンポジウムの場を利用してパソリンクによる研究室紹介などを行い、新しい人工現実感メディアの実験的な試みにも挑戦しています。

ニュースレターにくわえて、WWWの上にホームページを設けていますので御一読願えば幸いです。アドレスは以下のとおりです。

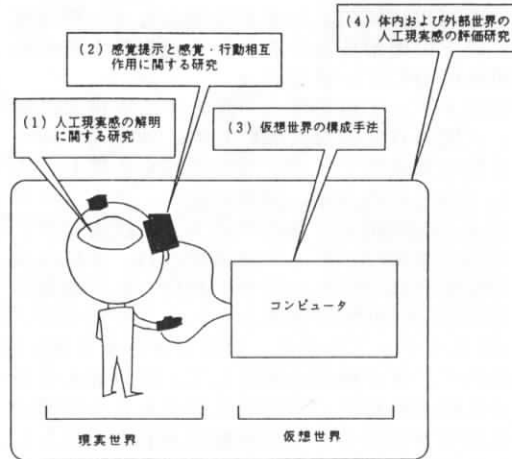


図1 人工現実感の研究

<http://www.star.rcast.u-tokyo.ac.jp/VRjuten/>
(舎官 日章：領域代表者、東京大学工学系研究科教授)

3.2 ヒューマンメディアの研究

通商産業省工業技術院は1996年度から10年間の予定で、次世代の国際的情報基盤への日本のアプローチであるヒューマンメディアプロジェクトを開始させる予定です。

(a) ヒューマンメディアへの技術潮流

米国が強力に推進している国際的情報基盤 GII (Global Information Infrastructure) 構想では、ネットワーク上に大量に分散している種々のコンテンツを共有化し、利用するためのデータベース統合化技術と、情報表現のメディアを多様化して、大量のマルチメディア情報を双方向に高速伝送するためのマルチメディアデジタル統合化技術が、技術上の軸となっています。

一方、1995年2月の情報サミットでは、様々な文化、様々な個人的背景、様々な利用形態を前提とした多様化技術が新たに技術の軸として追加すべきであるとの提言がなされました。この様に、高度情報化社会における情報環境の多様な利用者への広がりとその重要性に鑑み、また、将来の情報機器の利用を促進するためには、データベースやマルチメディアの多様化と統合化の視点だけでなく、利用者すなわち人間的な視点からの情報環境の実現が必須です。これは情報処理の根本的な問題でもありましょう。

(b) ヒューマンメディア技術

ヒューマンメディア技術は、人間と人間、人間と機械の間の情報授受に注目し、情報処理の専門家でない人が誰でも自由に体感的に情報基盤を利用できるようにするための技術です。この様なメ

ディアの利用技術の主な要素技術として、現時点では、以下の要素技術とそれらを統合化するための技術を検討しています。

- (i) 知識メディア技術は、対象とする実世界の知識、人間の日常的な常識の知識、個人が持つ断片的な知識やアイデア等の情報を表現し、内容レベルでの共有化、知識の拡大、コミュニケーションを実現するためのメディア技術です。いわば、多様なメディアで表現され、多様な文脈で解釈され、多様な背景で利用される情報を「通訳」し、共有できるようにする技術です。
- (ii) 仮想メディア技術は、対象とする実世界に働き掛けて、また情報を獲得して、実世界を仮想化する技術を核に、空間的に離れた人々の間でも実世界空間とそこでの経験の共有を可能とし、またそのための臨場的な情報環境を提供する技術です。いわば、マルチメディア情報を人と人との対話に利用し、空間的に離れた人々が共通の空間に「参加」し、知的活動の空間を共有し、また、共同作業できるようにする技術です。
- (iii) 感性メディア技術は、個人個人の美的感覚、情緒、ひらめき等の感受性での多様性をモデル化して、いわば外在化し、共有あるいは再利用すると共に、様々な利用者それぞれに直感的に受け入れられ易い表現を生成するための技術です。いわば、様々な感性を持つ利用者が情報を解釈し、表現する過程での主観的な特性に「共感」して、利用者の情報を受け取り発信する活動を支援する技術です。

これらの要素技術は互いに補い合うことにより、新しい技術を可能にすると期待されます。例えば、従来の Face-to-Face の伝送通信から、Image-to-Image (或は Idea-to-Idea) のコミュニケーションへの発展が可能となり、いろいろなマルチメディア処理を単に寄せ集めではないヒューマンメディア情報環境が実現されます。

(c) 実問題を指向した研究開発スタイル

優れた「技術」は良質な利用者達の協力の下に育てられる。ヒューマンメディアプロジェクトの研究開発においては、技術シーズ・コンテンツ・ニーズ側の3つのグループが協力して研究開発を進めることを検討しています。これは、技術開発から技術移転、市場開拓までを結び付ける体制を作ることに相当します。

(加藤俊一：電子技術総合研究所、知能システム部)

4. 今後の活動予定

H Cグループの今後の活動予定の主なものを以下に示します。

(1) 研究会開催予定

下記の2つの研究会を連続して開催します。

- ・ヒューマンコミュニケーション基礎研究会 (H C S)

日程：平成8年1月25日(木)

場所：機械振興会館

- ・ヒューマン情報処理研究会 (H I P)

日程：平成8年1月26日(金)

場所：機械振興会館

(2) シンポジウム「顔」

年1回H Cグループが協賛して行うシンポジウム「顔」は、今年度は以下の予定で開催されます。

日時：平成8年3月5日(火)

場所：早稲田大学国際会議場井深ホール

テーマ：顔をつくる。

(3) H Cグループ大会

H Cグループの3研究会(ヒューマンコミュニケーション基礎研究会、ヒューマン情報処理研究会、マルチメディア・仮想環境研究会)によるH Cグループ大会を、今年度は下記の予定で行います。

日時：平成8年3月6日(水)～7日(木)

9:30～17:00前後

場所：早稲田大学55号館S棟2階第3会議室

内容：招待講演、一般講演、チュートリアル。

懇親会は3月7日(木)17:30より。

一般講演の応募締め切りは平成8年1月20日(土)です。皆さん奮って御応募下さる様お願い致します。

5. H Cグループからのお知らせ

(1) H Cグループのホームページ開設

H Cグループでは会員の皆様に出来るだけ早く、最新のグループの活動内容や連絡事項をお知らせするため、インターネットにH Cグループのホームページを開きました。ホームページへのアクセス方法は以下の様です。

(ア) <http://www.ieice.or.jp> で電子情報通信学会のホームページにアクセスする。

(イ) IEICE's Technical Societies を選択する。

(ウ) Human Communication Engineering Group を選択する。

(2) H Cグループの会員募集案内

H Cグループは電子情報通信学会唯一の研究グループです。ヒューマンコミュニケーションに関心のある方々の参加を期待しております。

本グループへの参加を希望される方は、「氏名」、「会員番号」、「H Cグループ登録希望」と明記してファクシミリ(03-3433 6659)あるいは電子メール(service@ieice.or.jp)で学会宛に申し込んで下さい。本グループの会費は無料です。

編集後記

ニュースレターをお読みになった感想、疑問点、今後取り上げて貰いたい記事、項目などがありましたら是非お聞かせ下さい(murakami@c.dendai.ac.jp)。今後は、ニュースレターを双方向のメディアとして活用出来ればと思っています。